

## 地域研究に対する質問 その1, その2

荒木一視

私のやっている研究が地域研究なのかどうかと問われたら、はっきりとした答はおそらくできない。地域研究であってもいいし、そうでなくてもいい。それにこだわるつもりはない。むしろあまりに多くの人が口々に「地域研究」という言葉を使いすぎて、なんだかよくわからない言葉・概念になってきたような気がしているというのが正直の所である。だから、「(あなたのいう)それは地域研究じゃないだろう」とか、「これが地域研究だ」などというような、おそらくは不毛の議論をする気もない。むしろ、ここではいくつかの論点を提示してみたい。これらの点について地域研究者はどうした回答を準備できるのかという地域研究に対する問いかけでもある。

その1は、研究者(調査者)の視点である。地域研究の歴史をひもといてみればすぐわかることなのであるが、地域研究あるいはそれに類するプロジェクトは、多くの場合支配の道具として使われてきたということである。もちろん私の専門とする地理学も支配の道具としての長い歴史を持っている。古代の風土記の編纂も、徳川光圀の大日本史の編纂も、当時の国家の統合や支配と無関係ではない。ヨーロッパが世界中を植民地にする過程で、数多くの探検隊が組織され、世界中を調べてまわり、無数の標本を本国に持ち帰り、博物館に収納した。ありとあらゆる角度から調べ、記録し、保管する。戦前・戦中に日本が植民地支配・植民地経営あるいは戦争遂行の過程でおこなった組織的な地域研究もまたしかりである。戦後はアメリカから地域研究(Area Studies)がもたらされ、わが国でも九学会連合などが組織されて奄美や沖縄の調査がおこなわれた。こうした総合的かつ組織的な地域調査が国内外で展開され、その成果は一定の評価を得るに至ったわけではあるが、はたして調査者やその成果を手にした読者の視線に上と下はなかったか。調査者と被調査者との視線の高低である。それはあからさまに見下ろし(見上げる)視線ではなかったにせよ、「真実を追究する」とか言う美辞麗句のもと、被調査者

が触れられたくないことを暴き、それを「近代的価値観」とか「近代科学」あるいは「科学のメス」などという基準と照らし合わせて、如何にかけ離れているかというようなことを論じようとしたのではないのか。あるいは、調査の結果からもたらされる彼我の違いを、私たちは「異形を見る眼」「ものめずらしさ」としてみていたのではないだろうか。意識的、あるいは無意識的であったとしてもそのような好奇のまなざしを持ってはいなかっただろうか。その時、逆に私たち自身がそうした視線で見られるということを意識することはなかったのだろうか。こうした彼我を分ける視点に対して、地域研究者は常に敏感でいなければならない。

なお、以上の地域研究における調査者の視点については自著の中で、あるいは関連書籍を書評する中で、筆者が繰り返し述べてきたことである。具体的には以下の通りである。参考にして頂きたい。

荒木一視 (2006a) 「地理ってなに? -世界観のモンダイ」『小学生に教える「地理」-先生のための最低限ガイド-』2006年, 荒木一視・川田力・西岡尚也 著, ナカニシヤ出版, 3-27頁.

荒木一視 (2006b) 書評: 平岡昭利編著: 「離島研究 II」地理学評論, 第79巻第7号, 401-402頁.

荒木一視 (2004) 書評: 平岡昭利編著: 「離島研究」2004年, 地理科学, 第59巻第1号, 59-60頁.

荒木一視 (2001) 書評: 熊谷圭知・西川大二郎編: 「第三世界を描く地誌」2001年, 地理科学, 第56巻第1号, 56-58頁.

その2は地域研究でいうところの地域との関わり方、あるいは枠組みである。おおざっぱな理解として、「地域」研究というと特定の「地域」に深く入り込んで研究することを指すようである。中国研究なら中国に、インド研究ならインドに、というふうなのである。その際には現地の言語の習得は当たり前とされ、長いことその「地域」に滞在経験があることが何となく「よいこと」「価値のあること」のように認識されたりする。もちろん、言語を習得し、調査地に長期間滞在できるということは、優れたアドバンテージである。し

かし、多くの優れた研究者がそのアドバンテージのために、その「地域」の外に出られなくなっているのではと思うことがよくある。私は、(それが地域研究かどうかは別にして) 興味のままに、インドや中国、韓国を渡り歩いてきた。それぞれの言語も多少はかじったが、研究する上での武器にはとうていとどかないレベルである。断続的にあっちへ行きこっちへ行きはするけれど、同じ所に長期間滞在することはない。これは「あり」なのか「なし」なのか。普通こういうことをやっていると、「地域研究者」様からは外道扱いされかねないのであるが、このことをもう少し進めてみよう。インドと中国、韓国は確かに異なる地域であるが、たとえば、インドの地域研究といってもインドの北と南、東と西ではまるで異なる。同様に中国もしかりである。国土が大きいのであるから決して一様ではない。ではネパールではどうなのか。もちろんある程度の均質性はあるが、国土の北の山岳部と南のタライでは相当程度に異なるし、東と西でも同様に差異がある。でも、ネパール研究という。ここでの本質はインドとかネパールとかいう対象の大きさの問題ではない。対象が大きくとも小さくとも同様の地域内の差異という問題は必ずついてまわる。むしろ、問いたいのはここでいう地域の枠組みとはなんなのか？ということである。いわゆる「(近代) 国家」なのか？だとすれば、地域研究＝国家研究ということか？私は地域研究者（特に海外地域研究の場合）が余りにも無防備に国家の枠組みを地域の枠組みとして使用していることが気になってしょうがない。むしろ今とめられているのは国家をこえる枠組み、あるいは国家にとらわれない枠組みではないのか？だからあえて私は地域＝国家にはこだわりたくはないのである。

その3は、・・・とまだ、いくつもの論点を提起してみたいのだが、紙数が尽きた。残りはまたの機会ということで。